

## 概要報告

### ② 「“持続可能な地域づくり”に貢献する、SDGs 時代の森林産業

#### ～森林空間利用・六次産業創出を拓く地域林政アドバイザーのあり方～

小森 胤樹 (郡上エネルギー株式会社 代表取締役)

(郡上割り箸株式会社 代表取締役)

(郡上市地域林政アドバイザー(平成 30 年度))



ご紹介いただきました小森胤樹(つぐぎ)といいます。日本で、この名前は私だけです。

私は現場で、山で食っていききたいなど頑張っている人間の代表として、現場では試行錯誤しているという話しを事例紹介としてさせてもらいたいと思います。

お前は誰なんだという方ばかりだと思いますので、簡単に自己紹介を

1971年生まれ

団塊の世代ジュニアです。

大学に入学した頃はバブル、  
卒業時は就職氷河期

なんとか就職はしたけど・・・  
(こんな仕事してました)

仕事が面白いのかと言われると・・・



私のことを、おまえは誰なのか、と思われるかもしれませんが、先ず自己紹介をさせていただきます。私は、1971年生まれです。団塊のジュニア世代の人間で、大学に入学したころはバブル全盛で、卒業したらバブルが崩壊していたという、就職氷河期の1期生くらいです。なんとか就職はしたのですが、当時を思い出すと、4年生のゴールデンウィークまで就職先が決まらなかったというようなころでした。

それで、仕事はこの絵のような、もともとは研究職でした。ですから、私は、今日ここに登壇されている方のように、大学で林学を学んだことは一切なく、化学を学んだ人間として林業の世界に入っていました。仕事を始めて5年くらいしたころ、仕事が面白いのかなといわれると、ウーン、どうなのかな？というようなことがありました。そんな私が30歳を迎えたころ、この先の人生を考えようと、仕事がそう面白くないのに稼ぐためだけにこのまま仕事していいのかな、という思いがありました。



当時、私ぐらいの年代・30前後ぐらいで林業の世界に入っている人は、このままこの仕事をしていいのかと思い、思い切って人生のベクトルを変えようと思って現場に入っている人が結構多くいます。今でも、日本全国のそういった人たちとお付き合いさせていただいているのですが、仕事は仕事でいいのか、本当にやりたいことは何なのだというふうに、私の中でこの辺の葛藤が数年あったのですが、そこを話すだけで1時間ぐらいかかりますので、そこは省きます。私が結論に至ったのは、日本の林業を守る仕事に就こうと思い、そのためには、林業の現場から、日本の森林について人々に伝える立場のような人間として働きたいと思うようになったというのが最初です。

日本の森林を守る仕事に就こう！  
林業の現場から日本の森林について人々に伝える人間になろう！

縁も所縁もない岐阜県郡上市に移住して、  
林業会社に作業員としてIターン

それが17年前

私は大阪の生まれで、31歳まで大阪にいたのですが、縁があって岐阜県郡上市というところの林業会社の一従業員として、Iターンという形で移住しました。ちょうど当時Iターン者という言葉が世間一般に認知されはじめたころのことです。それが17年前なので、17年前をスタートにお話をしていきたいと思います。



林業に転職して、4年目。  
森林施業計画を立てて  
計画から実施まで行うようになる



結果1  
補助金という林業行政の仕組みを  
理解するようになる

仕事は現場作業員からはじめました。最近の若い人は現場にあまり植栽場所がないので、植栽の仕事はありません。私の場合もわずかな時間でしかありませんでしたが、苗木を植えるという仕事をしました。そして、夏場の現場の仕事は、もう炎天下の隠れるところがないところで、ほぼ下刈りと除伐といった作業ですから、1日に4リットルぐらいの水を飲みながらやっていました。それから枝打ちの仕事もしました。この画面ではノコギリを使って切っていますが、この会場には林業関係者がほとんどいないのでちょっとそのお話しをします。私が住んでいる地域の枝打ちは、背中にエンジンを背負って、手元で刃が回っているカーツカッターという機械で、チ

チェーン、チェーンと枝を切り落とすのですが、私はもうちょっとで親指の先を落としかけたというような思い出もあります。

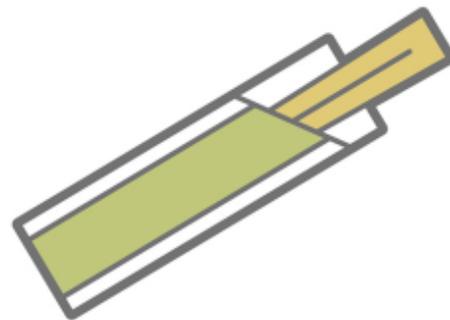
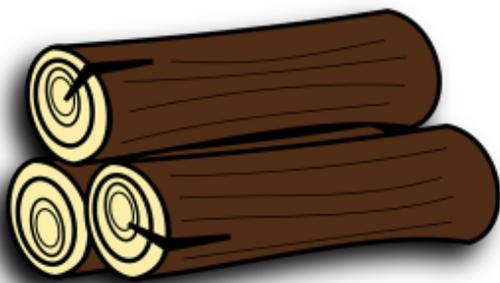
それでも山の作業のベースは、チェーンソーを持つての仕事です。集材するときは、私と同世代の人なら鳶口を使い、まだそれを持っている人も多いと思います。私も、架線を張って山落としという作業をしました。山落としとは、山で伐倒して玉切りした丸太を谷に落とす作業です。落として線の下まで持ってこないと集材できないので、材を落とすためにトビを持って何日か仕事をしましたが、トビの使い方が分かっていなかったので、2日もトビ仕事をしたら握力がなくなり、3日目は仕事にならない、というぐらいの技術しか持っていませんでした。このようにして、私が会社に入ったころは、運良く、植栽から、伐採、集材といった仕事をひととおりでできる時代でした。

林業に就職して4年ほど経ったころ、現場だけで働いていても面白くありません。そこで、施業計画という国の補助金をもらって、自ら計画を立てて仕事をしようと思いました。補助金をもらうには、キチンとした計画を立てて補助金申請をしないといけないのですが、補助金が出る仕事をするので、現場作業員で分からなかった森林行政の仕組みがだいたい分かってくるようになりました。ああ、こういう仕組みでこうやってお金が来て、でもこんな矛盾点があるのだということも分かってきました。

## 人工林の木を使うことが日本の山を守ることになる

現場作業員が作る商品は丸太

誰もが選択して買える木製品？



私が、森林を知らない多くの皆さんに伝えたいことは、人工林の木は、伐って使うことで日本の森を守ることになるのですよ、ということです。現場で仕事をしていても、私たちは林業者として、素材生産業者として作る商品というのは、丸太なのです。丸太しか作らないのです。その丸太を、例えばここにいらっしゃる皆さんに、木を使ってほしいのでこの丸太を持って行って使ってくださいといっても、そんなものもらっても困る、ということになります。私は山で仕事をしていると、BtoBなら仕事ができるのですが、BtoCはなかなかつながりが持てないというジレンマに陥りました。そこで、何か誰もが使いたがる、誰もが選択して買える木製品はないかと思って行き着いたのが、割り箸でした。ここにいらっしゃる皆さんは、割り箸は使い捨てにするし、木材資源を無駄にしているのではないかと考えていらっしゃる人が圧倒的だと思います。

ところで、国産材の自給率は、ここ十数年で一番下がったときに18%でしたが、今は35~36%まで上がってきています。そういった中ですが、国産の割り箸の自給率は何か、皆さんご存じですか。これは、2~3%くらいしかありません。日本で消費されている割り箸の97~98%はほぼ中国から入ってきています。しかしご存

じのように、この10年で中国の人件費も上がってきたので、中国で割り箸を作っても思うように採算は取れません。そのため、この10年の間に10%ぐらいはベトナムでつくるようになり、ベトナムからも割り箸が入ってきています。それでも国産の割り箸は2~3%しかありません。そういった現実を知って、皆さんが国産の割り箸を当たり前のように使うようにならないと、丸太を、日本の木を使うというような意識にはならないだろうと思いました。

## 7年前、郡上割り箸という会社を作って、 国産材割り箸の普及活動をしている



### 結果2

林業の業界だけには広がらなかった世界が開ける。  
商業、教育（木育）・・・6次産業化（農業との違い）

そこで、林業会社で働きながら、7年前に郡上割り箸という会社を作って、国産材の割り箸の普及活動を続けています。これは一つの例ですが、岐阜にはFC岐阜といって、いまJ2で最下位争いをしている、このまま行くとJ3に落ちるのではないかとちょっと心配なサッカーチームがあります。そのFC岐阜がホームゲームをやるときは屋台村が出るのですが、割り箸を使うお店には全部、郡上のスギでつくった割り箸を使ってもらるようにしています。ただ、お店もそんなにコストをかけられないので、ここに書いていますように地元の岐阜車体工業さんにスポンサーになってもらって、国産の割り箸と中国産の割り箸の差額部分を埋めてもらい、国産の割り箸を使ってもらう活動をしています。また、その割り箸の会社では、岐阜県産の木材を使って、このような積み木などをつくったり売ったりしています。これは、東京おもちゃ美術館に行ってもらって売っていますので、ご希望の方は是非ご購入ください。

こういった活動の結果分かったのは、林業の世界から広がらなかったものが、商売をはじめると色々な人とのつきあいが増えてきて、商業や色々な産業グループの中に入ります。そうすると、そこには林業者は誰もいないのですが、教育や木育などに手を伸ばしていけるようになってきました。

それではこれを6次産業化と言うのかというと、私の中ではそんなに胸を張って6次産業化しているとは言えないなと思っています。一人でやっている事業ですので、うまいこと回っていけるというものではありません。そういったところが農業と比べて、1事業者や、1人レベルで6次産業化と言うのは、木材ではなかなか厳しく、地域でやっていて難しいところです。

こちらが出かけていくだけでも良くない。  
実際に山に来て実感してもらわないと。

少し話が変わりますが、こちらから色々なところへ出かけて行って、山の木を、割り箸を通じて、日本の木を使ってくださいと言っても、私が一人で行ける、人に出会える範囲は限られているので、なかなか広まっていかないということです。逆に、実際に山に来てもらって、ああこういうことなんだね、山は気持ちいいよね、などと実感してもらおう活動もしないといけないなあと思い、そういったこともはじめました。

子供たちを山へ連れて行く森林環境学習は  
10年以上続けてきているが・・・



興味がある人だけにしか  
広がらないジレンマ



10年ぐらい前からは、地元の住宅メーカーさんと協働して、このように子どもたちを森に連れて行き、実際に私がチェーンソーで木を伐って倒し、伐った切り株に触らせたり、年輪を数えたりさせています。また、伐った切り株の上を見てもらって、間伐をして空間ができて明るくなったでしょ、といったようなことを実感してもらおうなどの活動をしています。この写真の黄色と赤のユニフォームを着て説明しているのは私です。

こういったことをずっとやっており、またこのようなことは確かに必要でもあるのですが、ただこういうところに来てくれる人というのは、興味のある人で率先して足を運んでくれるのです。でも、興味のない人、そうい

った人のところにはそういった情報が行かないというのが日本の現状です。そのため、今日の課題のSDGs というようなことを使って、興味のない人でも当たり前前に山に来るとい社会の仕組み全体を作っていないと、本当に広がっていかないというのが、長年このようなことをやってきて思うところです。岐阜県も、森林環境税でこういうイベントを開くといい、家族4人が参加して、お弁当付きで、バスで山の中を連れて回ってもらって、きょう1日楽しかったなというふうに、こういったことがタダで体験できるのです。それでは、これに1人あたり5000円払ってください、と言ったときに人が来るのかというと、ほとんど来なくなります。そうなる、山側で来た人たちを受け入れる人たちのお金というのは、いつまで経っても税金から補助金という形でしか支払われない。林業が飯を食っていける種になるのか、というジレンマがあります。

5年前、木材生産以外の森林の価値を市民に提供したいと、  
管理する山の横に冒険の森を誘致

手入れ前
手入れ後





**結果 3**  
地域の観光業とも関わるようになる。  
山に関心の無い人を山へ連れてくる仕組み（関係人口の拡大）

5年前に私が、150ヘクタールの森林の経営計画を立てて管理している山があります。すぐ隣に、昔公園として整備したものの、結局今は何にも使っていないという広い場所があったので、そこに何とか人を連れてきたいと思い、冒険の森という会社を誘致することにしました。左の写真が、ほったらかしになっていたもともとの森林ですが、福井県に近いところで、平らで遊歩道などもあります。木は100年生近いスギで、木の直径は40~50cmあるのですが、枝は太いし、伐って出しても、たぶん60%はパルプチップの原料にしかならないような品質の木材しか生えていません。このように、この山を皆伐しても儲からないなという状態なので、森林空間を活用して誰か人が来るようになってほしいと思い、ワイヤーロープを張って遊ぶ施設(ジップライン)を作ったところ、このように人が来て遊び、気持ちのいい空間になりました。

もう一つは、作業道をただ歩くだけではおもしろくないので、セグウェイを導入し、来た人たちと一緒にセグウェイに乗って、私が色々解説しながら山の中を案内して行きます。これは電動でエンジン音がしないので、動物も逃げません。山を歩いて行くのにストレスもなく、乗り物に乗って楽しい。プラス山の色々な話を広くしてもらえますよということが、日本においても当たり前になるべきではないのかと思っています。

もう一つ、作業道はそれが1箇所の伐採のためだけであれば、次に間伐まで10年ぐらい使わない場合があります。その間の補修コストはどうやって賄うか。このように山を遊びで使うならば、団体や施設に対して、あなた方は毎週、毎月、季節に使うから、多少の補修コストはそっちで面倒みてね、道が荒れたらあなたたちで直してくださいね、ということにすれば、林業側の補修コストが減るのではないかとすることも提案しています。

そして、結果3として、地域の観光とも関わってくるとになると、山に関心のない人も連れてくるようになってきます。つまり言い方を変えると、関係人口が拡大するということになるのではないかと思います。

こんなことをやりながら、私のベースの考えは

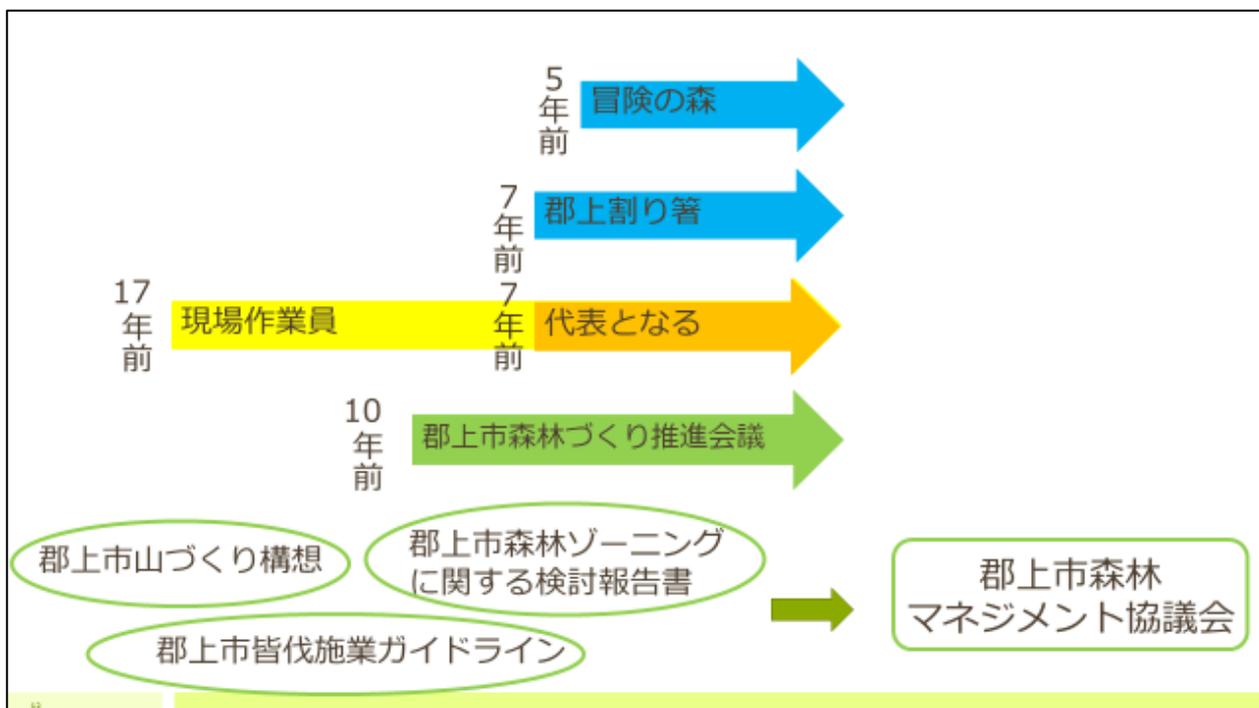
日本の森林を守る仕事に就こう！  
林業の現場から日本の森林について人々に伝える人間になろう！

このような立場の仕事はないのか？

8年前と4年前にドイツへ行き、林業の仕組みを見てきた

“フォレスター”という存在を知る

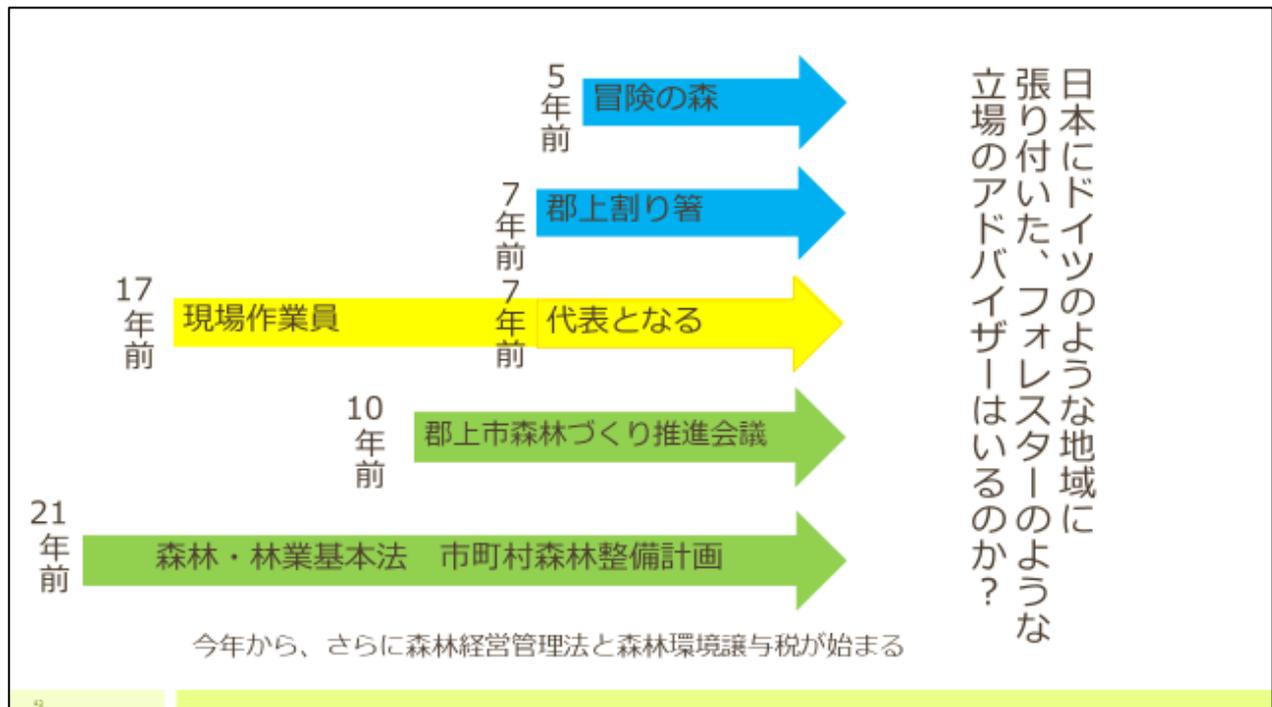
こんなことをやりながら、私のベースとしての考えは、最初にお示したように、林業を守る仕事に就こうというところです。日本にはこのような立場の仕事はないのか、と思っている中、8年前と4年前に、ドイツの林業を見に行くという経験させてもらったのです。むこうに行くと、フォレスターという人がいます。フォレスターは、木材生産だけでなく、地域の色々なことを面倒見るよという、言わば、日本なら地方にいる派出所のお巡りさんみたいな人で、あの人に聞いたら何か相談に乗ってくれるといったような立場の人です。



これまでにお話ししてきたようなことで、17年前に現場作業員から林業の仕事を始めました。そして、その都度色々なことをやってきました。7年前に勤めてきた会社の社長が亡くなりましたので、その後の社長を引き継ぐということになりました。

そして今度は、民の立場ではなくて、10年前から私が住んでいる郡上市の森づくりの推進会議の委員をやり、行政側の色々な活動に意見を言う立場になって、10年間関わらせてもらっています。その間に、郡上市の山づくり構想や、郡上市には皆伐が増えてきたので、施業のガイドラインの作成を一緒にやってきました。そして、木材を作る山なのか、環境を守る山なのか決められないから、山のゾーニングをするということもやりました。そして去年、森林環境譲与税と森林経営管理法ができるという中で、郡上市はそれを使って全体の林業をちゃんとしましようというマネジメント協議会の座長をやっています。

こういうことは市町村がしっかりやらないといけないとなっている理由は何かという、私がかかっているのは、21年前に森林・林業基本法が改訂になったことです。法律が変わって、市町村森林整備計画を市町村が責任を持って作りなさいということになりました。そうすると、市町村には色々な仕事が一気に来ることになります。林業という目的であったものが、森林の多面的機能を発揮させるようにやりなさいということになったのです。



こういったことを考えたときに、やはり日本もドイツのような、地域に張り付いたフォレスターのようなアドバイザーがいるのかと、あらためて思ったのです。

申し訳ないが、居ない（私の周りでは思いつかない）



居ないなら、自分がそのポジションで仕事がしたい

しかし、どう探しても周りにはそういった人はいない、日本にはそういう仕組みができていないのです。そこで、いないなら私が勝手にそのポジションで仕事をしますと言って、やるしかないなという思いに至りました。

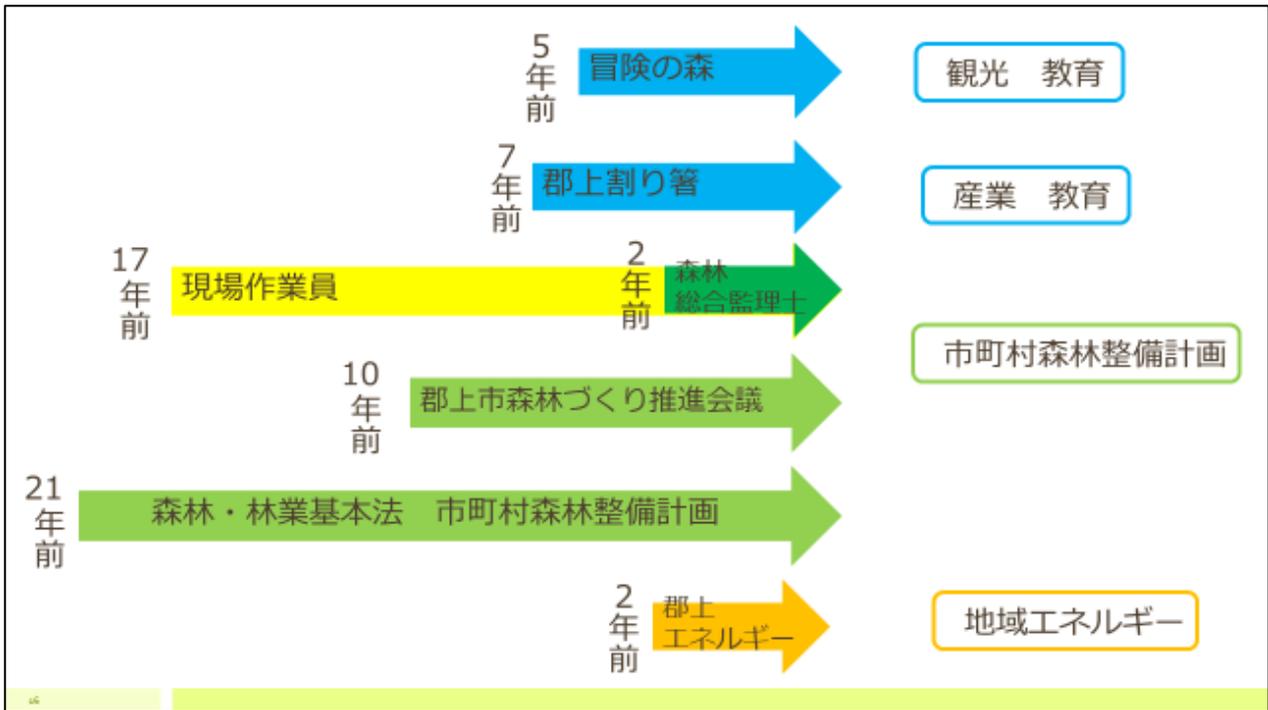
平成25年度  
森林総合監理士というポジションが生まれる

平成28年度、資格取得

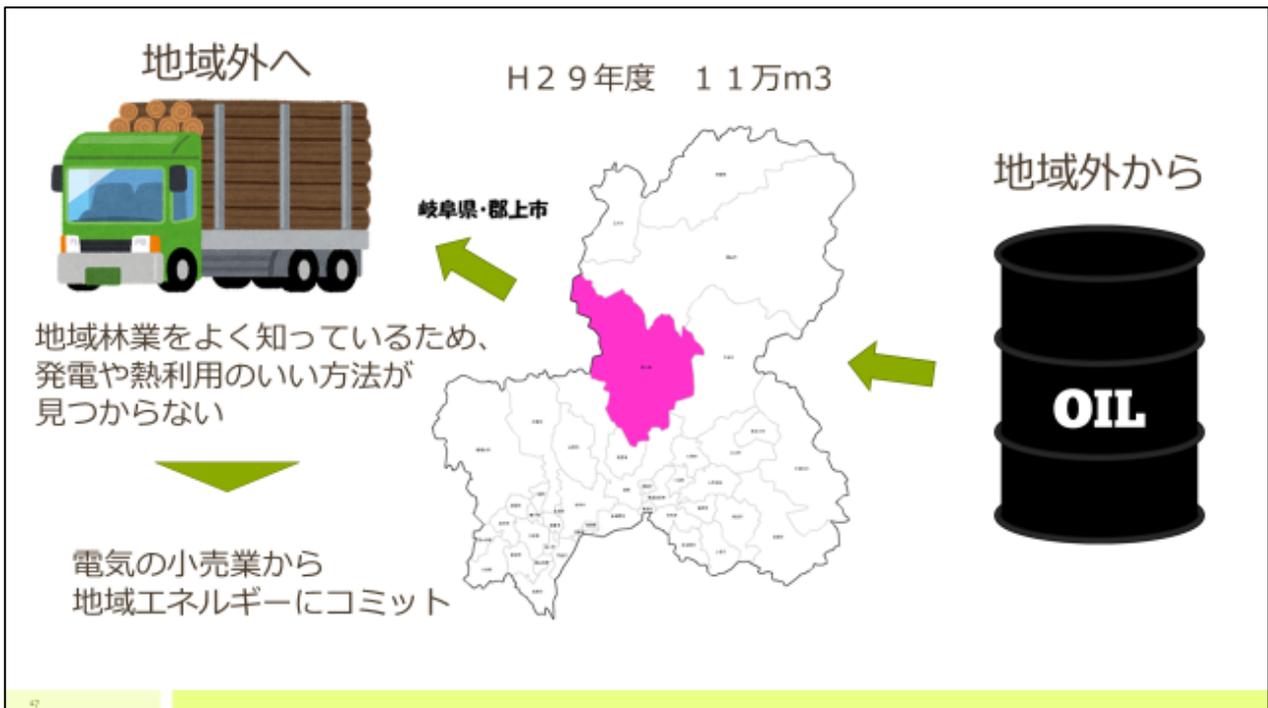
平成29年度  
地域林政アドバイザー制度が始まる

独立しよう！

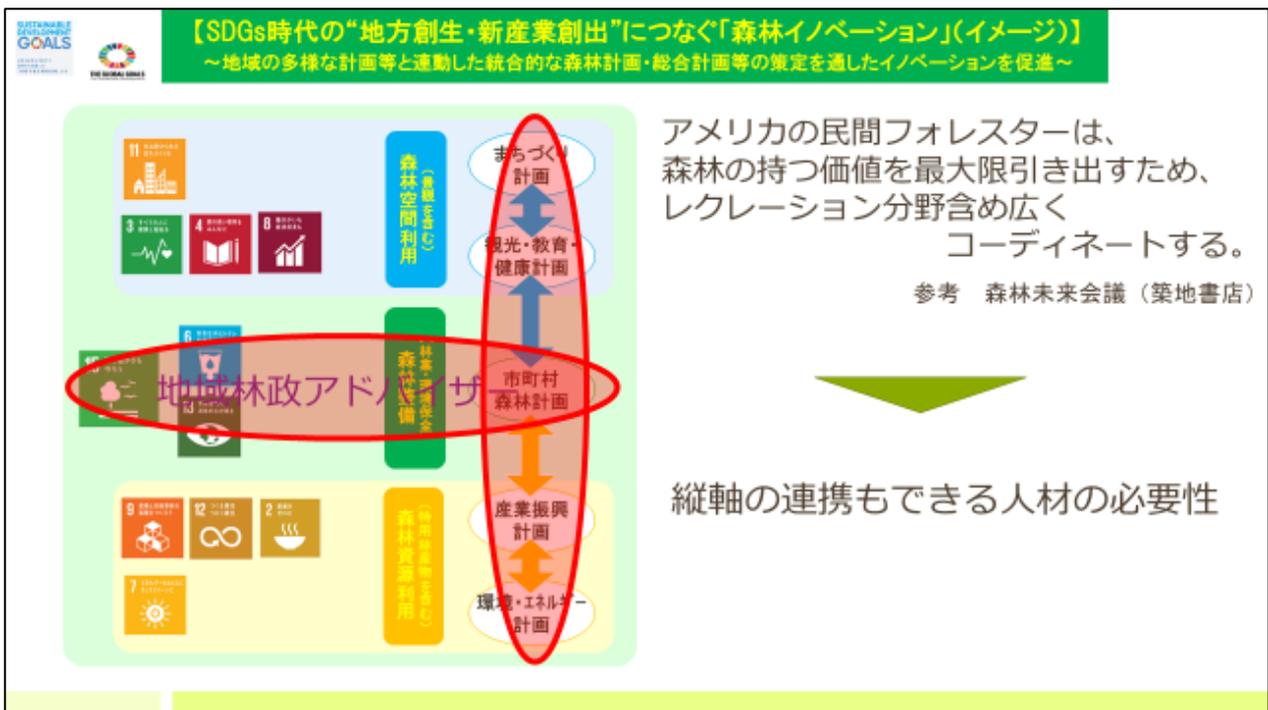
そして、平成25年には、森林総合監理士が生まれました。これは、なかなか民間人は取りにくいのですが、何とか取りました。29年度には、地域林政アドバイザー制度が始まったので、これで雇ってもらえれば給料をもらえるのではないかと思い、そのポジションに身を置こうと判断しました。ということで、雇ってもらっていた林業会社の社長を辞め、森林総合監理士として、林業のポジションで仕事をしていこうと決めました。観光や教育、産業をやりながら、民間で働きながらも、市町村の森林行政に関わる仕事もさせてもらっています。



そんな中、今日の私の肩書になっている郡上エネルギーという会社は、地域の木質バイオマスもどうにかしたいと思い、2年前に作りました。



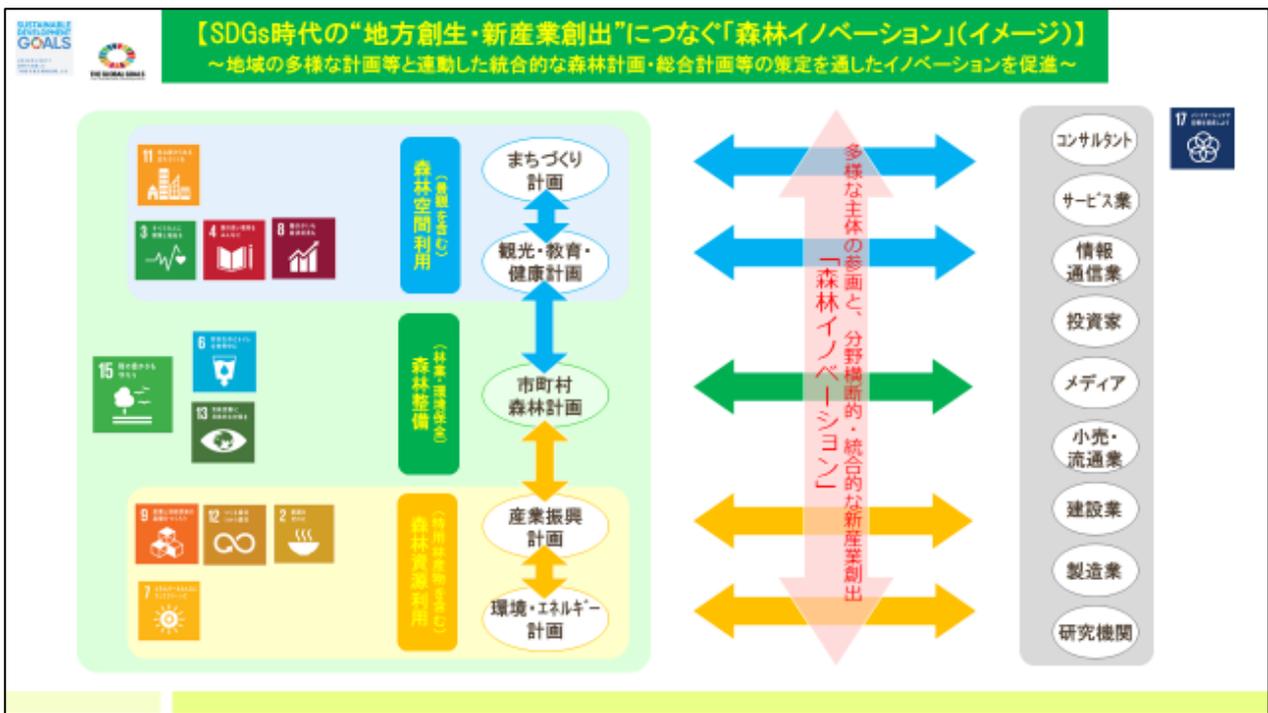
さて郡上市は、平成29年度に11万立方メートルの木材を生産しています。この中の木質バイオマスは3割ぐらいあるのですが、エネルギーとして全部地域の外でしか消費されていません。雪が降る郡上市なのに、アラブから灯油を買ってバンバン燃やしています。これはもったいない、何とか地域でエネルギーとして木材を使えないかと思っているのですが、郡上の木質バイオマスをうまく使っていきような仕組みが、今の日本林業界には存在しないということです。経済的に補助金がなくても、ちゃんと経済として回っていくものが見つからない中で、このエネルギーの小売業からスタートしています。



最後になりますが、こういう立場で何とか、何とか地域の林業にコミットしながら、ご飯を食べさせてもらっているポジションですが、市町村は、私のような林業の現場で活動している地域林政アドバイザーを、林業の世界だけのコーディネート役としてしか見ていないというところがあります。

実際私は今年度の6月に、新潟県が主催する市町村向けの林政アドバイザーの研修会の先生役をやってきました。昨日は兵庫県が行った市町村の林政アドバイザーの研修でも先生役で行ってきましたが、市町村の人たちはみんな困っています。市町村には林務担当者がほとんどいないという中で、色々な林務行政の仕組みが降りてくるのに、その処理を誰に頼んだらいいのかわからない、本当に困っている、人材がないという実態です。その人材は確かにいないのですが、私は林業の世界だけではなく、もう一步、もう少し広く、林業から観光、そしてエネルギーなど、広く人を紹介できるような林政アドバイザーも出てこない、地域全体をうまくまとめることはできないのではないかと思います。

先ほど基調報告でもお話がありましたとおり、アメリカのフォレスターは、逆にそういったことを民間のフォレスターとしてきちんと商売としてやっていけるということがあります。ですから、縦軸の連携もできる人材が絶対に必要であると思っていて、自分がその役になれるかどうか分かりませんが、そう言い切って、そのポジションとしての仕事がしたいと思っています。



そういうことをやっていくには、本日ここにお集まりの皆様のように林業関係の薄い一般の方々に、どういったネタで、どうやって森林や林業に関わってもらえるかということ、皆さんのお話を聞いて是非ヒントをもらいたいと思います。そして、そうだ、この市町村にこんなことで声をかけてみようというふうに思ってもらえると、大変ありがたく思います。そこが17番のパートナーシップというところになってくるとと思います。

### ここ最近、動き出したり、相談されたこと。

- ・ 大阪にて、飲食業のスタートアップを支援している企業の社長と飲食業界の社会貢献のため、国産材割り箸の普及活動をやろうとプロジェクト立ち上げ。
- ・ EMTBで林道使って長距離のツアー事業を立ち上げたいんだけど、どこにどう相談すればいいだろうか

#### 考え方

国有林、民有林の林道、作業道の利用契約

使っていない林道、作業道の  
チェックとメンテナンス費補填



また最近、大阪の飲食業界が、お客さんに国産の割り箸を10円でも15円でも出して買ってもらう、といったことが動き出しています。

もう一つは、マウンテンバイク。このEマウンテンバイクの性能が上がってきているという話があります。このバイクはスキーで有名なロシニョール製で、なおかつ電動アシスト付きなのです。国有林の林道を解放してもらって、このバイクで長距離を走り回れる仕組みを作ることができたらおもしろいと思います。山側には林道補修の経費がないとき、先ほどお話しましたように山側の仲介者が連携して行く、例えば林道を貸してもらえ

るならお客さんを連れてくる、林道に壊れているところが見つければ、そのお客さんが写真を撮ってきて林道の壊れた箇所を教えてくれる、また、ある程度使用料も払います、というふうになれば山側の維持管理コストも減ってくるのではないかと考えています。

終わりに

経済学者シュンペーターによるイノベーションという言葉の定義は、  
「新結合」「新しい捉え方・活用法」を意味しています。

将来、皆さんや私たちの子供たちが森林から受け取る便益をどうするのか

ご参加の皆さん、それぞれの立場・お仕事と森林の「新結合」が

必要だと思えます。

ご静聴ありがとうございました

最後に、経済学者シュンペーターのイノベーションという言葉の定義は、全くないものを化学反応させるというのではなく、いままであるもの同士を結合させて新しい捉え方や活用方法を見出すことを言っています。将来、皆さんや子どもたちが森林から受ける便益をどうするのか、ご参加の皆さんのそれぞれの立場とお仕事で森林の新結合ができればいいのかなと思いますし、そういうことが必要だと思っていますので、是非ともご協力をよろしくお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。